

旧東京市の初期近郊農業

岡 本 兼 佳

研究の地域と時代

研究の目的と方法

- 一、明治初期、東京の土地利用変化
 - 二、明治初期、乳牛飼育の地域発達
 - 三、市制時代の十五区内周縁立地酪農
 - 四、明治初期の東京近郊野菜地域
 - 五、青物市場と近郊野菜圏
 - 六、明治期、東京の近郊植木類草花栽培地域
 - 七、明治期、東京の近郊果実生産性
 - 八、明治期、藍その他の近郊生産性
- 結論

研究の地域と時代

明治になって江戸は東京となり、東京府五郡の大区小区の行政区時代から、明治十一年（一八七八）の郡区町村編

制法によって、東京府の行政区画は十五区六郡となった。すなわち郭内を麹町・神田・日本橋・京橋・芝・麻布・赤坂・四谷・牛込・小石川・本郷・下谷・浅草・本所・深川の十五区に、郭外を荏原・東多摩・南豊島・北豊島・南足立・南葛飾の六郡に分けた。明治二十二年（一八八九）の市制施行によって、十五区の各領域に若干異動を見たが、区の名称に変わりなく、昭和七年（一九三二）からの三十五区時代へ続く。

ここに東京市は、厳密には市制施行の明治二十二年以後であるが、江戸から「東京」になった後、大区小区時代および十五区六郡時代を含め、およそ大正初期までを研究対象として近郊農業を検討することとする。

研究の目的と方法

都市近郊農業は、近郊の農産物が都市需要に応じ、都市消費に吸引されて成立し、その供給都市は固定している結びつきである。この結合機構は交通運輸の幼稚な時代ほど典型的となることも自明の理である。都市の農産に対する需要を、近郊の農村のみが孤立的に受持つからで、輸送方法の車馬時代に近郊農業地域の外周限界はシャープにきまる。また、都市の農産消費性は当該都市人口の大小によるは勿論で、市民の屋敷内に自給菜園などあればその需要性は低くなる。

明治期の東京は、明治十五年（一八八二）十五区の人口七〇万、明治四十五年（一九一二）東京市の人口二〇〇万、農産の輸送方法は車馬・舟によっていたから、近郊農業地域を周辺によく発達させていた。大正・昭和の時代に進んで、遠隔輸送による競合・淘汰を受けることになるが、明治期は外部の影響のきわめて少ない、東京と周縁農村との結合性をもって近郊農業を成型していたと言ってよいのである。

研究上、明治期の農業関係資料としては、明治五年（一八七二）の東京府志料があり、これは当時の東京府行政区一一大区一〇二小区について、最小単位の各「町」「村」の事実をあげ、とくにその「物産」欄の農産物が好資料となる。ただこの記録は、農産物名の不統一な表わし方、例えばぶきを款冬・蔞、しょうがを薑・生姜、たけのこを筍・笋など用法を一定せず、その量目も同一品目を荷・駄・把など異なる単位をもってし、その計量も目分量的な不正確さがあるが、農産を個別に小地区的な分布を示すものとして利用価値をもっている。

東京府統計書は明治九年からあり、明治十五年以後、十五区六郡の行政区別に載っており、事象によっては「町」「村」別に小地区単位に検討できるものもある。

土地利用図としては明治十三年（一八八〇）陸地測量部の二万分の一迅速図がもっともよく、東京市街地とその周辺については明治二十年（一八八七）内務省地理局の五千分の一図が詳しい。東京市街地を中心に近郊を含む一枚図としては、明治十二年の東京図があり、このほか明治期各区の部分図も事象把握のために利用すべきものが多い。農産関係の事実をとらえるために、区史・郡誌・町村誌があり、東京市史稿の農事関係事項も、重要な典拠として探索すべきものである。

研究方法は地点と時点、地域と時代の観点に立ち、地空間的隆替を時間的盛衰のもとに追求し、地域差を分界づけ、認識する。近郊農業が市街地周辺に波及隆替し、その時間的盛衰の変化・不連続に立って地域を認識し、自然的属性との関連を検討するのが地理であり、ここではその手法を基本線におきたいのである。

一、明治初期、東京の土地利用変化

明治維新の変革期における東京市街地およびその周辺の土地利用変化は、旧藩邸跡地の開発を目指した明治二年（一八六九）の桑茶政策であった。上中下屋敷を含む広大な藩邸跡を開墾し、府下住民に生業を与え、当時の輸出対象品目であった生糸と茶に着目して桑と茶を植えさせたのである。この結果を明治六年三月の開墾諸邸宅地坪数調（し）によると、全体で凡そ百拾万六千七百七拾余坪が郭内外樹芸開墾地となり、内桑茶は凡そ百貳万五千貳百七坪余である。この分布は市街地内にも及び、変革時代の変則的土地利用ではあるが、当時東京の農業特徴を基本的に性格づけていた。

東京府志料によって、生茶および製茶の分布をみると、街道沿い伸長街に卓越し、青山南町・同北町、麻布の筈町・新筈町、巢鴨仲町・同原町から同三丁目などに立地し、このほか千駄ヶ谷・大塚・小石川の台地の町などにある。かなり広範囲から集荷加工のできる製茶は、市街地・村落部の接点に立地して、茶葉の集荷圏を構成しているのである。

また、明治十三年（一八八〇）測図の二万分の一迅速図をみると、市街地近接の周縁地に茶園の卓越をよく表わし、東京近郊の土地利用を明らかに特色づけていることがわかる。

このような明治初期東京の茶栽培は、全く東京の都市需要性に応じて成立したものではなく、近郊農業として後述する野菜類等とは範疇を異にするが、この当時、近郊的土地利用として景観を支配し、ここに変則的擬似近郊農業としても差支えないと思われるほどである。

桑茶政策の一環としての桑畑の立地も、ほぼ茶と似ているが、その面積ははるかに少なく、また蚕桑は明らかに都市近郊的でないから、明治初期、強制的土地利用として出現したものの、その後退も著しく、ここにとり上げるほどでない。

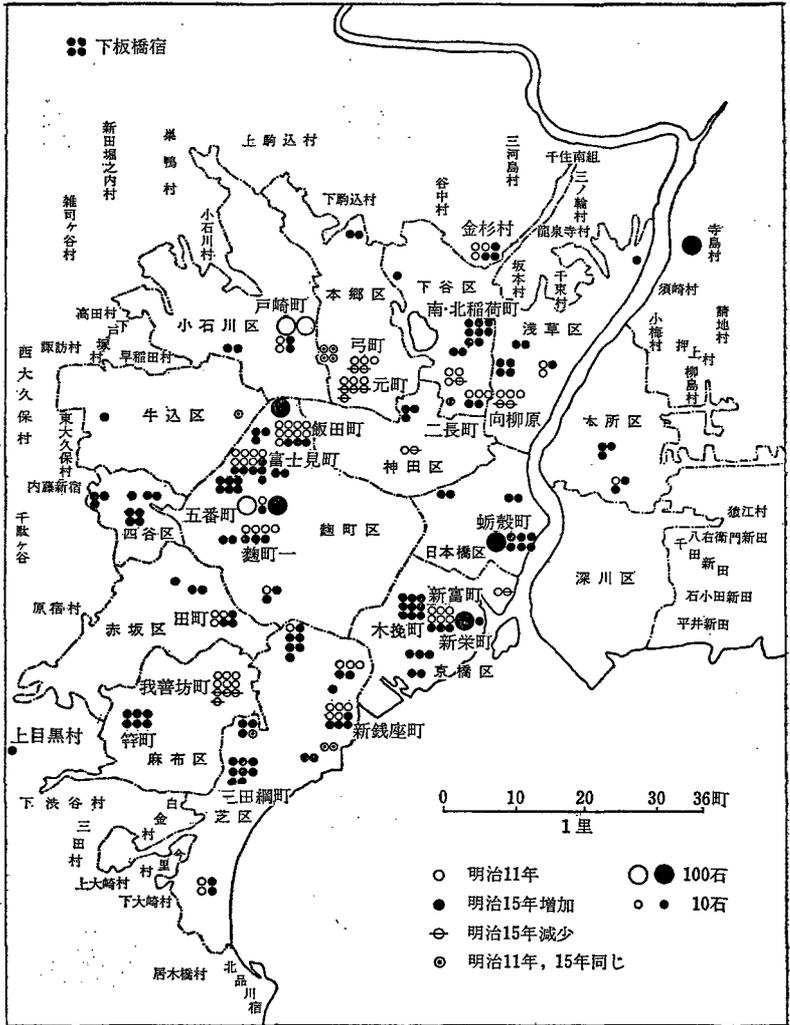
二、明治初期、乳牛飼育の地域発達

桑茶政策による土地利用に対して、新規に発展した特徴的産業は乳牛飼育である。明治開国によって外人の居留となり、牛乳飲用の生活が浸透し出したからである。

明治三年（一八七〇）には築地牛馬会社が、市民に牛乳飲用を宣伝し⁽²⁾、牛乳^(洋名)・乾酪^(洋名)・乳油^(洋名)・懐中乳の粉^(洋名)・懐中薄乳の粉^(洋名)など、当時すでに牛乳加工品もあげている。このころ福沢諭吉も牛乳を用いてその効用を賞し、この会社に礼状を送っている。

東京府志料の物産の項には牛乳の名は全く見当たらないが、明治六年の牛乳搾取并牧畜許可についての願出状⁽³⁾によると、その願出人は芝新堀町・練堀町・神田佐久間町・牛込北町・本町相生町・南神保町・下谷仲御徒町の者で、当時の市街地近接地居住者であり、従って「不潔臭穢近傍故障筋有⁽⁴⁾之候ハ、速ニ可⁽⁵⁾令⁽⁶⁾取⁽⁷⁾払⁽⁸⁾候事」⁽⁴⁾を誓い、また、「牛乳搾取人心得規則」⁽⁵⁾の第一条に「糞場不潔臭穢無⁽⁶⁾之様注意可⁽⁷⁾致事」と定められ、市街地接触立地の様相をよくうかがわしめる。

乳牛頭数および搾乳高を小地区別分布に吟味できるのは、東京府統計書の明治十一年（一八七八）から同十五年に及ぶ各年の統計である。東京府全体の搾乳量は明治十一年の一三七一石から一四九八石、一七七六石、二四七三石と



第1図 明治11年および明治15年の町村別搾乳量

逐年増加し、明治十五年の二一五九石となったが、第一図の明治十一年「町」別搾乳量分布は、当時の乳牛飼育立地を明らかに表わしている。

麴町区では皇居の西方および北方の外濠内

飯田町・富士見町・麴町一丁目に集積地があり、小石川区では市内最多生産の戸崎町二二三石から弓町・真砂町・元町へ集積地区をなす。浅草・下谷区では向柳原・二長・仲御徒・練塀の各町をもって一つの集団性を表わし、以上は神田を中心とする市街地消費に対する西・西北・北の外縁地区形成にはかならない。京橋区の新富町・越前堀地区は銀座市街地の周辺背後位置、芝区の烏森町と新銭座町・新堀町地区は、新橋付近から東海道に沿う市街地の周縁乳牛地区となっている。

さらに麻布区の我善坊町、芝区の高輪南町は東京市街の南西端および南端の、金杉村は北端の乳牛飼育地で、当時の外周末端部に当たっている。乳牛飼育地も藩邸・武家屋敷を利用したものが多く、市街地に近接して糞場不潔臭穢の接触現象が多かった。

以上の集積地区は明治十三、十四年と地区充填および周辺拡大を強め、芝区の三田綱町・麻布区の笄町のように新しく進出したところもある。郡部への分散的拡大は荏原郡の上目黒村・北品川宿、南葛飾郡の寺島村などに進出を見た。さらに明治十五年には、以上の地区形成を充填拡大するとともに、とくに日本橋区の日本橋市街地の後背曠穀町に牧牛舎・自在舎・東明軒などの新経営が出現している。

このように東京の乳牛飼育は都市の中に胚胎し、明治十年代には市街地近接立地の牛乳生産地域型をとり、農村地帯への進出はきわめて僅少であった。東京の初期牛乳生産は酪農としてではなく、「町」の先覚的企業家によって「町」の中に発生したのである。

明治十五年の牛乳生産高(6)を町村別分布図としてみると、第一図の通りで、麴町区に生産中心をおいて、深川区を除く各区に生産し、郡部では南葛飾郡と北豊島郡・荏原郡に波及している。

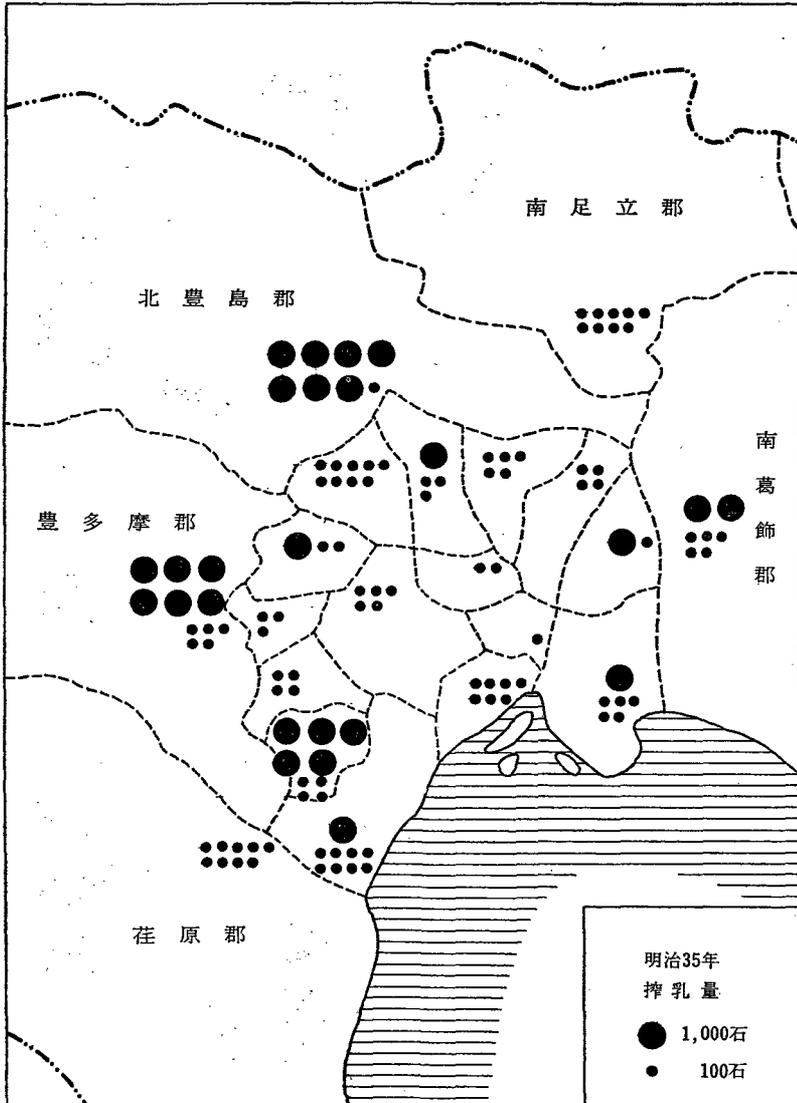
第2表 明治25年東京
郡区別牛乳業者

	搾乳業	販売業
麴町区	8	8
神田区	5	28
日本橋区	3	40
京橋区	11	25
芝区	24	31
麻布区	15	8
赤坂区	7	2
四谷区	5	1
牛込区	25	1
小石川区	15	5
本郷区	16	21
下谷区	11	14
浅草区	8	28
本所区	20	16
深川区	11	8
荏原郡	8	6
東多摩郡	2	—
南豊島郡	17	—
北豊島郡	19	1
南足立郡	1	—
南葛飾郡	2	—
計	233	243

第1表 明治19年東京郡区別搾乳量

	搾乳量	一営業者 平均搾乳量
麴町区	927石	103石
神田区	166	42
日本橋区	242	48
京橋区	892	81
芝区	576	41
麻布区	325	23
赤坂区	164	55
四谷区	173	29
牛込区	536	41
小石川区	379	63
本郷区	367	37
下谷区	443	74
浅草区	276	46
本所区	123	25
深川区	49	16
荏原区	318	45
東多摩郡	14	14
南豊島郡	50	17
北豊島郡	213	42
南足立郡	16	8
南葛飾郡	75	
計・平均	6322	46

第一表は明治十九年郡区別搾乳量(一営業者平均の搾乳量)であるが、麴町区の最高は営業規模からの中心性を表わし、これに次ぐ京橋区はその消費地近接による規模として理解せしめる。郡部は周縁的小規模



第2図 明治35年東京郡区別搾乳量

第二表は明治二十五年の郡区別搾乳業者と販売業者(3)で、一両者の地域立地差は、販売業者の消費地近接立地、搾乳業者の十五区中の周縁立地が明らかであり、また、郡部の南豊島・北豊島へ顕著に波及し、酪農生産への変化を示す。

三、市制時代の十五区内周縁立地酪農

市街地の発展とともに乳牛生産地も動く。とくに不潔臭穢な乳牛飼育は、市街地と不協和的で、しだいに周辺郊外に推し出される。その結果、さきの十五区中央立地型は第二図のように移動し、十五区内周縁立地型に変わり、さらに郡部に進出して郡部内環型の傾向を見せている。周縁「区」にはすでに明治二十年代から増加し始めるが、明治三十年代の後半には中央立地型と対照的な周縁立地型となり、明治三十五年の時点において第二図のように成型化する、この移行過程を「区」別にみると、麴町区は乳牛頭数も搾乳高も明治三十三年(一九〇〇)まで増加する中に、外縁「区」への増加によって中心性を失い、また麴町区自体も明治三十三年をピークとして減少し始める。外縁「区」は京橋・深川・本所・本郷・牛込・芝など逐年増加していずれも麴町区の生産を超える。ただ京橋区は明治三十四年をピークとして比較的早く下降し、東京湾に瀕して後退する背後地もなく、持続と発展の空間を失って減少のテンポを早め、明治三十八年には消滅する。翌三十九年に至って都心四区の麴町・神田・日本橋・京橋いずれも完全に牛乳生産性を消失し、東京牛乳生産地帯をドーナツ状に環状に成型するのである。そしてこの時期には牛乳供給上、搾乳業と販売業を分化し、都市内部の販売業者に対して、より農村内に搾乳業者を立地するのも特色である。

ひるがえって、牛乳生産地域はすでに明治十五年から郡部に進出し、しだいに増加の傾向をとっていた。区部接壤

農村のごとき、日本橋から一二軒圍のうちであり、輸送上の大きいハンディキャップもなく、乳牛飼育を酪農として増加しつつあった。十五区内外周時代に進んでますます発展し、郡部酪農時代への基礎を固めるのである。

十五区内外周型から郡部内環型への移行を地域的に吟味すると、総体的には明治三十四年までは市部に、その翌年から郡部に増大する変化をとる。すなわち、明治三十四年乳牛頭数において、市部十五区合計一九一〇頭に対する周縁五郡合計（北・南・西の多摩三郡を除く）一七五二頭、搾乳量において前者一八三三七石に対する後者一一九二三石と市部に優越し、翌年には乳牛頭数の前者二二三頭、後者二六四二頭、搾乳量の前者一六三六一石、後者一八〇二九石といずれも郡部にウエイトを移すのである。ただこれを地域密度的に吟味すると、明治三十五年に市部は郡部よりも密度が大きい。それは市部をとりまく五郡の酪農地に地域差があり、豊多摩・北豊島両郡以外は密度が低いからである。郡部においても豊多摩郡のみは明治三十年代の後半、市部をしのぐ密度に達し、とくに区部近接町村は東京府の酪農中心となっている。

十五区内乳牛飼育は以後漸減し、大正十一年（一九二二）の合計八三頭は芝区三六、四谷区三四、深川区一三と残るが、最後は芝区の大正十四年飼育農家三戸の飼育頭数三四頭、昭和二年の一戸六頭となって、この年をもって十五区の乳牛飼育は消滅する。

四、明治初期の東京近郊野菜地域

東京府志料の「村」別物産から野菜類の生産地域を検討する。

本所・深川の東部においては、旧中川まで野菜類生産の地域密度が高く、当時の近郊野菜類生産地域を表わす。そ

の野菜類を分類して生産構成をみると、葉菜類を卓越し、漬菜・京菜・菜(も)・葱の生産が多い。果菜類はこれに次ぎ、胡瓜を一位に茄子を二位とし、越瓜これに次ぎ、南瓜(10)ははるかに少ない。根菜類は菜菔(11)その他いづれも僅少である。この葉菜類と胡瓜の優越は沖積デルタへの適地性に基つき、高燥適地性の南瓜の寡少と長根性の根菜類の鮮少は逆に対照的にこれを裏づける。根菜類中亀戸大根はこの地に発祥し著名であったが、これは於多福大根とも呼ばれる浅根性で微高の沖積畑に可能であったからである。

旧中川以東は葉菜類を減少し、果菜類の胡瓜・茄子に南瓜・冬瓜・甜瓜と多種類構成をもつて地域変化する。これはより自然堤防の発達した適地性と、比較的遠距離輸送の可能な果菜類の距離圏性を反映するものと解してよい。根菜類の細根菜菔を増すのも微高の沖積畑の多くなることに基づいている。

下谷・浅草の北郊においては、千住・三河島低地から南足立郡全域に葉菜類栽培を優越し、葱・漬菜・芹・三葉芹・款冬の産地をなす。北東部の自然堤防発達地に葱、北西部の低湿地に芹・三葉芹・款冬を卓越して、適地性を量産に表象し、三河島・尾久低地産の漬菜は三河島菜として賞味され、適地性を質的に表象する。坂本・竜泉寺・千束の三村には紫蘇の特産があり、市街地近接と適地性の二要因充足を表わす。

葉菜類に次ぐ果菜類に茄子・越瓜・甜瓜があるが、ここでは強く地域性格を示標するほどの生産量ではない。根菜類はさらに少ないが、青芋の一般栽培は保湿度低地への適地性に立ち、バックマーシュにおける蓮根・慈姑の特産は低湿地環境の利用を示している。また、谷中本村から稲付村・根葉村に至る台地寄りの薑産地とくに谷中薑・根葉薑はその良質をもって、地域の生産力を質的に表象するものである。

総じてこの地域は神田青物市場から一四・五軒、千住青物市場から八軒圏内にあり、すなわち埼玉県境近くまで漬

菜地区が延び、蓮田がひろがるのであって、ここに距離圏的地域差よりも微地形的適地立地の方が強く反映していることを認識しなければならない。

以上のデルタ近郊性を東京西南部にみると、荏原郡の東京湾岸および多摩川デルタに、果菜類生産優越の中、葉菜類生産の複合性も強く、葱・菜・落の一般的生産のほか、不入斗・新井宿両村の高蒿・紫蘇・波稜草・野蜀葵、上下蛇窪・北蒲田三村の生姜の特産など、近郊デルタ野菜生産の類型性を表わす。ただこの方面には北蒲田・御園両村に野菜類生産の限界が明らかで、以速に拡張しない。神田市場からの距離一四・五軒をもって、北郊と等距離に野菜圏の限界を示すことは注目に値する。

以上の低地地域に対して、本郷・小石川の北郊から芝の西郊にかけては、台地地形上の近郊農業性である。台地の間に侵食河谷の低地性を介在するが、大勢は台地農業として特色づけられる。

本郷・小石川の北郊、北豊島郡地域は根菜類を優位とし、とくに茱萸を特産化し、周知の練馬大根の本場を明治初期から形成し、その他胡蘿蔔牛蒡も普遍的に栽培して「土物」生産に特徴を見せる。

次いで果菜類が多く、茄子を全域的に、南瓜・越瓜との複合生産を南半の市街地寄りに表わす。これは下板橋・長崎・葛ヶ谷以南、神田市場からの距離八軒圏内で、生産出荷量もこの内圏に多い。中心の池袋・巣鴨両村、蕃椒生産を複合する諏訪村があつて、地域密度の高い近郊農業の圏状構成を明らかに見せている。

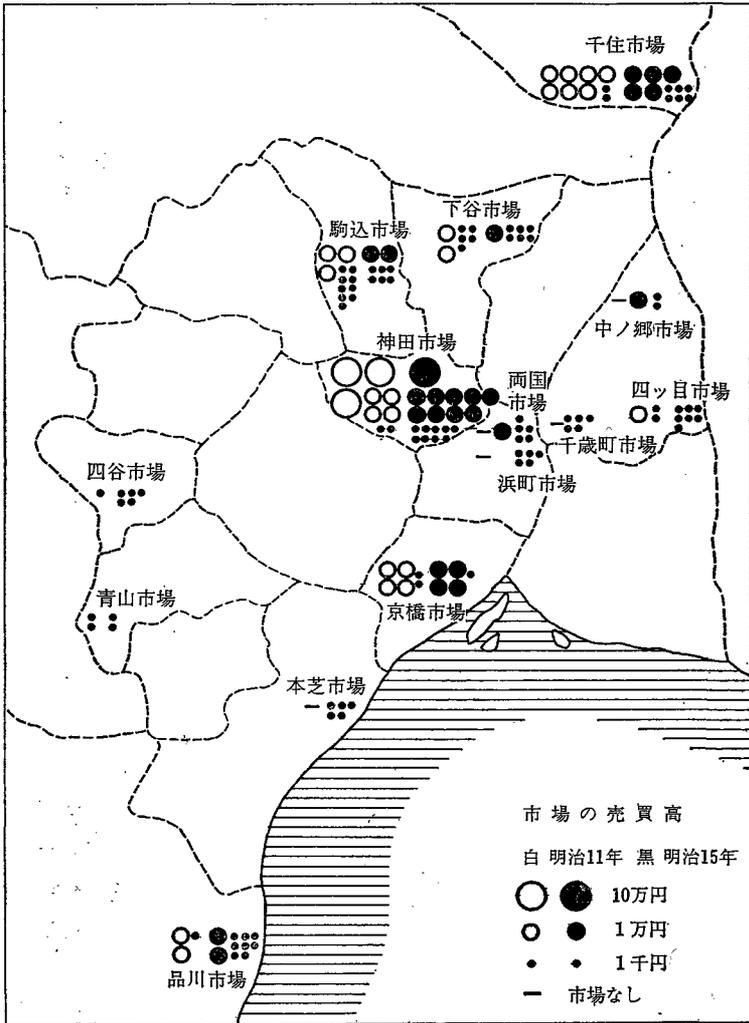
台地地域には葉菜類は少なく、如上根菜類を中心に果菜類を加え、近郊野菜性を特色づける。深く軟らかな台地土壌の多い適地性に立ち、葉菜類も、果菜類の胡瓜も表出せず、対照的に南瓜を多くして台地の高燥性を反映し、地域の自然性に根ざす近郊野菜地域を形成しているのである。

牛込・四谷の西郊、豊多摩郡地域に目を向けると、北豊島郡地域と類型し、菜菔・胡蘿蔔・牛蒡の根菜類卓越、果菜類の茄子の一般性と、神田市場からの八軒圏内に南瓜・越瓜の複合生産性など、北豊島と地域配列および生産構成を同型にする。八軒圏は上高田・本郷・幡ヶ谷、上中下渋谷の各村を含む東部で、中野村・原宿村はこの地域密度の高い地域の代表的中心をなす。

赤坂・麻布・芝西郊の荏原郡地域は、根菜類・果菜類を卓越して豊多摩と類型するが、筍の生産地を広くし、北西部に独活の特産地区を有して他の台地と生産性を変化する。根菜類の種類別にも胡蘿蔔・牛蒡は少なくなり、果菜類も茄子の全域的生産と一位は豊多摩と同じだが、南瓜の生産を著しく増して茄子と伯仲するほどに多くなる。これも台地の高燥性に立ちながら、北豊島に比べて遜色のある土壌条件に基づくからである。野菜種類別構成と生産出荷量の地域差は、東部に地域密度を高めるが、ここでは神田・京橋の市場距離とシャープに八軒圏をもって限定されず、上目黒・碑文谷・馬込の線が分界線となり、南部は品川市場からの四軒圏に属する。

以上この時期における野菜類の示す東京近郊農業の地域差は、一次的には低地と台地の差にあり、おのおのその適産性に立ち、距離圏による圏状地域差は下位次元に属すると言わなければならない。輸送方法にみる地域差もまた、低地の舟主車従に対して、台地の牛馬と車専用と異なり、これは距離上の時間差よりも損傷度の低い舟輸送によって、低地部に軟弱野菜生産を助長することになる。

ここに圏状構成よりも自然性適応による立地が強いことを帰納的に言うことができる。



第3図 東京の明治10年代における青物市場

市場の名称は明治25年以降のものに統一。神田市場は東組・西組の計，神田・京橋・両国・駒込・四つ目・千住の市場は問屋・仲買人の計，その他は問屋のみ。

五、青物市場と近郊野菜圏

野菜類の近郊圏は都市消費集団とその周辺生産供給地域との結びつきにあるが、野菜類は市場に出荷され、消費者に供給されるのが普通のルートであるから、その距離圏は市場を中心として考えるのが適當である。従つて近郊圏は日本橋中心でなく、神田その他の市場を中心とすべきである。日本橋は密集市街地人口の重心ではあつても、野菜供給上の目的地でなく、また東京市消費集団の形態は、明治初期に全く同心円状でないから、近郊農業圏の基点とすることは学術的に不合理である。

東京の青物市場は明治十一年（一八七八）、第三図のように立地する⁽¹²⁾。これらを地域構成的にみると、神田・京橋二市場の繁華街近接型、駒込・下谷・四ッ目・青山・四谷五市場の市街地周縁型、千住・品川二市場の最外部立地型を判別することができ、ここに当時の野菜類の蒐集と配分の地域組織を示唆していると言つてよい。

神田・京橋の二市場は位置的には繁華街の北と南にあり、地域分担立地と見られるが、問屋・仲買人の数に大差があり、売買高も神田の三四・二万円に対して京橋は四・〇万円で、神田の東京中心性を明らかに示す。これに、明治十四年日本橋区の浜町市場、明治十五年日本橋区の矢ノ倉市場、本所区の千歳町市場が開設され、これら三市場は隅田川をはさんで東部の野菜供給拠点として新生したと見るべきで、北・南の神田・京橋に対して東の繁華街近接型立地と言つてよい。明治十五年の取扱高は新設三市場合わせて二・八万円に過ぎず、神田の一八・九万円、京橋の四・一万円に対する供給分担力として理解せしめる。

市街地周縁型の市場は街道沿い伸長街における農村との接点位置にあり、駒込市場の中山道・岩槻街道、下谷市場

の陸羽街道裏道、四谷市場の甲州・青梅両街道、青山市場の大山（厚木）街道、四ツ目市場の豎川水路および行徳街道をそれぞれ主軸として農村集荷圏をもち、その大小に比例した市場を形成している。このうち、売買高最大の駒込市場は明治十一年三・九万円、広い農村集荷圏の上に、神田市場と三十町（三・七軒）の距離で中継機能を加えて発達にプラスした。下谷市場がこれに次ぐのは、その北方に広く三ノ輪・三河島低地帯の集荷圏をもつからで、四ツ目市場は東、葛西地域のデルタ農村に集荷圏を広げている。四谷と青山は明治十一年売買高にほとんど優劣はないが、明治十五年四谷は青山の四倍の売買高に増加し、これは麴町から内藤新宿の市街地発展に負うところが大きい。

このほか明治十三年から統計面に現われる本芝の市場は、この年青山・四ツ目とほぼ同様の取扱い高を示し、東海道沿い芝区中心の集荷圏規模を示唆し、本所区中ノ郷竹町の市場は明治十五年から現われ、この年四ツ目市場の倍以上の売買高をあげて、四ツ木街道を軸とする葛飾の集荷圏の形成を示す。本芝・中ノ郷両市場とも街道沿い市街と農村の接点位置は共通し、ここに市街地周縁型立地の増加を見たのである。

最外部立地型の千住・品川の両市場は、その成立史が示すように農村中心型市場として発生し、後に東京への供給性に発達したものである。千住は明治十一年の売買高七・二万円で、全市場中神田に次ぐ地位を示し、問屋・仲買人も多く、神田市場との連係および投師・方角師・茶屋商人等による東京市八百八町への中継機能がきわめて大きい。従って本木村・弥五郎新田・小谷野村を結ぶ千住から三・五軒、神田から一〇軒の内圏に集荷圏の地域密度を高め、さらに千住から八軒、神田から一四・五軒の南足立郡辺境をも、その軟弱野菜の出荷圏に包括する。

これに対して品川市場は明治十一年問屋のみで仲買人を欠き、その売買高も下谷市場の二・五万円に対して二・一万円ではない。その後の発展によって明治十五年は二・八万円となり、下谷市場の一・六万円、駒込市場の二・七

万円をも超えるが、千住市場の五・六万円に對してはその半ばにとどまる。品川市場は、神田市場を大中心とする一四・五軒の近郊農業園の中に、地区的に供給密度を高める構造性を止揚しているが、神田から一〇・五軒、京橋から八軒の距離は大きく、仲継機能を千住市場のはるか下位にとどめると解すべきである。

六、明治期、東京の近郊植木類草花栽培地域

都市生活者の植木類・草花の觀賞生活は早くから見られ、東京から江戸にさかのぼってその記録は古い。ここで明治初期以降について検討すると、まず東京府志料の「物産」にその名をみる。

市街地近縁には坂本村の菊・牽牛花があり、最遠地点には京橋からの行程十三軒に北蒲田村の夏菊生産がある。このほか北郊に神田から一二軒の西新井村は菊を出し、草花生産として載る、神田から一二軒の青戸村、同じく九軒の篠原・四ツ木・渋江三村などがある。植木類産地としては西大久保・諏訪両村と大久保百人町が神田から四乃至七軒の位置にある。これらの生産地代表が示すように、植木類・草花の生産地域差は、低地の草花、台地の植木類で、損傷の難易による距離圏ではない。他の記録から補足しても、駒込・巢鴨・四谷・麻布など江戸時代からの植木類生産は台地で、堀切の花菖蒲は低地である。ただ低地の請地村は草花・植木類、麻布の台地飯倉片町・竹谷町は植木のほかに菊栽培で知られ、植木と草花を複合生産する。これらは草花鉢植に盆栽の植木を加えて商品を多様化し、また台地の中に侵食谷低地を介在して両者とも生産適地があるからで、上の立地性を否定するものではない。

軟弱な草花生産はデルタの沖積土壌の保湿性に適し、強堅な植木類は台地の乾燥ローム土壌の利用に相対的に適応選択されてきた。草花栽培の地域発展はデルタの沖積土壌地帯に進み、植木類の生産はすでに駒込・巢鴨の古い記録

にみるように、「土壌薄く樹木ニ宜シク穀物ニ宜カラズ」⁽¹³⁾の相対的適産地に立って各種の觀賞樹木栽培に向かったのである。

植木類と草花はこの適地性に立って地域分化したが、距離圏的には市街地近縁とその外圏との地域密度差に表われる。すなわち、両者を通じて近縁圏に生産量とその加工性を増すのである。

この時代の加工性は鉢植・盆栽で、坂本村の牽牛花一〇万鉢、千駄木町の菊鉢植などがこれを証する。また、江戸時代から植木屋で知られた四谷において、伝馬町・荒木横町・忍町・大番町などの植木屋は、「近在より新木を買入、同所にて木振を直し、所々致^レ売買^ニ候也」⁽¹⁴⁾と、樹形・樹相の鑑賞価値を高めて都市人に供給する近郊性があつた。

このように植木類・草花の近郊地帯構成は、栽培上の適地性による台地と低地を基盤とし、生産量と加工性にその距離圏性をみる。損傷の難易、輸送の便不を要因とする圏状変化は一義的には強くない。

これらの近郊栽培は当然都市化によって外部移動するから、これを次の実証例についてみる。

荏原地域では明治三十九年(一九〇六)に植木職・造庭職・苗木職の町村別戸数⁽¹⁵⁾が、大井町の四五戸を最大として、八―五戸四カ町村、四―一戸六カ町村、その他の町村には全くなかった。大正四年(一九一五)には目黒町の一六三戸を最高に、大崎・大井両町のおのの一〇五戸、品川町の五六戸、四九―一〇戸の町村五あり、以上いずれも区部寄りの東部町村であり、芝・麻布からの移行を明らかに証している。

同じく豊多摩郡について⁽¹⁶⁾、大正四年の時点における農家数対植木職・造庭職・苗木職の比率は、千駄ヶ谷町農家数一三五戸の一〇〇%、大久保町農家数一五五戸の九六%、内藤新宿町農家数一〇二戸の八四%、淀橋町農家数二

五八戸の七五%、戸塚町農家数二〇四戸の七二%、渋谷町農家数五二五戸の六五%と、区部隣接町に異常に高い。同じくこの率において代々幡町二八%、落合町二七%、中野町二二%と少なくなり、さらに外縁の村は低率となつて、この時点における区部隣接町にこの業者の中心地帯を明らかに示す。明治後期にはなお区部に高率地域のあつたものが、大正時代には郡部を中心を移している。野菜類の近郊生産は明治初期にすでに郡部を中心を移していたが、市街地近接性の植木類は大正初期によりやく中心を郡部に移行している。耕地を失つても造庭職など技術生業をもつて存立し、より市街地近接立地性をとることがわかる。

七、明治期、東京の近郊果実生産性

明治期市民の果実需要性は弱く、その生産性に強く近郊性を求めることはできない。東京府志料の物産に載るものを抽出すると、西郊から西北郊の郡部、一二籽圏・一六籽圏に柿・栗の出荷圏を認めしめる。柿・栗は遠距離輸送しても商品価値をあまり低下しないが、当時の輸送方法は荷車・牛馬車で遠距離移入は容易でない。内陸高燥台地の適地条件のもと、柿・栗を一二籽圏・一六籽圏の供給可能範囲に近郊果実供給圏を認めることができる。従つて一二籽圏・一六籽圏は野菜類とは量的に少ないが、それと複合せる柿・栗の近郊圏であり、また、遠方からの輸送移入によつて地域分化をおこさない時代の近郊性である。

十五区内の果実生産に注目すると、大久保百人町・池袋村および穩田・上渋谷・上豊沢の地続き三村に柿・栗・梅の出荷を見る。柿・栗の供給をこの八籽圏に形成するのは、一二籽圏・一六籽圏との同質性にほかならず、梅の供給性は少量でも市民の生活必需性からこの近圏に供給地をおいたものである。

西南郊の果実生産性は、栗は無く、柿も減り、梅と梨を優位に、そのほか巴旦杏・枇杷・柚のある多様性である。梨は多摩川デルタの自然堤防州立地、梅・巴旦杏・柚は台地高燥地、枇杷はこの地域の暖地性に適地性をもつ。少量であっても各種果実を欲求する東京都市性を、西南郊の一二杆圏・一六杆圏は供給を分担する地域である。ただ西南郊の十五区内に果実の生産をあげず、全く一二杆圏・一六杆圏の外圏に果実近郊性を認めしめるのみである。

東郊および東北郊の沖積低地では、同じく一二杆圏・一六杆圏に梨・葡萄の生産と供給をみる。梨は新川梨¹⁷⁾で江戸川デルタの自然堤微高地を利用、この時代多摩川デルタの多摩川梨と照応していた。この地区においても十五区の内圏には見られず、本来に低湿性の果実生産不適性によって、さきにもた軟弱葉菜栽培に専門化している。

以上、果実もそれぞれ自然的属性への適性に立ち、とくに台地と低地の立地差のもとに生産地を分化して東京への供給圏をなし、近郊立地型をとっている。

八、明治期、藍その他の近郊生産性

次に藍は染料としての都市消費性から東京周縁生産地をもってその近郊性とする。生産は東京府統計書によると、明治十年（一八七七）に豊島郡（五郡時代）が東京府全体の八七％、明治十四年に北豊島郡（六郡時代）が同じく六二・三％、明治十五年に北豊島郡が同じく九三・七％と、北豊島郡地域に独占的である。小地区的に「村」別にあげである東京府志料によると、生産農村は北豊島・東多摩両郡内に集積性を認めしめる。藍は台地畑の栽培で、低地部には南葛飾・南足立両郡および荏原郡の低地部にもきわめて少ない、近郊農業地帯としての距離圏からは八杆—二〇杆の帯状圏にあり、とくにその外周部に多い。八杆圏内では青山北町と原宿村のみに現われる。

台地でも荏原郡にはなほは少なく、北豊島郡を中心として、これに続く東多摩・南豊島両郡の東寄りに藍産地を形成している。すなわち藍産地は大根生産卓越地と一致し、深く排水良好な耕土、しかも適度の保湿度をもつ土壤条件に支持される。栽培期は大根の秋に対して藍は春夏であるが、畑の自然的属性の好適性を共有する自然基盤に立っていると言ってよい。

藍作は明治二十年以降、安いインド藍の輸入に押されて衰退し、ほぼ明治末をもって消滅してゆくが、明治前半期、上述の諸農産と同様に近郊性をとって栽培されていたのである。

都市周縁農村の都市応需性は農閑の活動にも見られる。東京府志料にあがる顕著なものに薪・炭・竹・農産加工品がある。薪は西から西北・北の台地上、一六籽圏から二〇籽圏の諸村からで、炭は薪と複合する中に、二〇籽圏の遠園の方に多く、薪と異なる燃料特質を示す。竹は台地利用の特徴的植生で、とくに豊多摩・荏原の供給便宜な一二籽圏・一六籽圏に密度を高くする。

農産加工としての都市供給品は草箒・草鞋で、草箒は西北郊一二圏・一六籽圏に多く、草鞋は西南郊デルタの稲作地で、葉のある農村副業と輸送条件その他の地理性を反映して遠園の二〇籽圏にある。

結 論

明治期における東京市の近郊農業のうち、牛乳生産は始め酪農としてでなく、町の中に発生発達し、後、周辺農村に波及して近郊酪農として発達した。野菜類は江戸時代から近郊農業の中心をなし、明治初期から郊外の郡部に拡大していたが、野菜類の種類による地域差は、適地の自然性に大きく基盤をおいて、輸送の便・不便、損傷の難易等に

よる距離圏性は強くなかった。東京周辺一率な同心円状でなく、低地デルタ・高燥台地に生産基盤をおく地域構成である。自然性を捨象して打出したチューネンの圏構造は地理学的でないから、ここに比較考証の対象とはしないが、明治期東京近郊農業は、自然的属性とくに一次元に低地・台地の差に立つ地域構造であると帰納される。従来チューネンの圏構造を適用して、第一帯・第二帯などの圏状差を認めた研究もあるが、部分的象眼からはともかく、東京周辺全環に検討し、地理学的にその自然的属性に立てば、同心円の帯状構造は下位次元に考えざるを得ない。

このことは植木類・草花その他にも共通に言えることである。

他の特徴は輸送機関の幼稚さによって、一四軒乃至一六軒圏に各種農産を複合することで、この中に都市需要を満たす構造である。外部遠隔地からの移入がなく、移入による動揺混乱もなく、地域分化も顕著でないのが一大特色である。牛乳移入の始まり⁽¹⁸⁾は明治三十六年(一九〇三)の房州からであるが、これは一旦中絶し、大正の中頃から漸次連続的に増加してくるから、明治期の東京牛乳生産には外部の影響はなかった。野菜類・花卉の導入も農産物輸送施設の発達してからで、明治期これらの影響を受けない近郊農産地域の形成を認めることができたと言ってよい。

注および参考資料・文献

- (1) 東京市史稿 市街篇 第五十五
- (2) 同 第五十四
- (3) 同 第五十四
- (4) 同 第五十四

- (5) 同 第五十五
- (6) 東京府統計書 明治十五年
- (7) 同 明治十九年
- (8) 同 明治二十五年
- (9) 小松菜のこと。
- (10) 原本は蕃南瓜。
- (11) 原本のまま、以下、その他の作物名も一部を除いて原本のまま表わす。
- (12) 東京府統計書 明治十五年
- (13) 新篇武蔵風土記 稿卷之十九 豊島郡之十一
- (14) 四谷区役所 四谷区史 昭和九年
- (15) 小田内通敏 帝都と近郊 大正七年
- (16) 東京府豊多摩郡役所 東京府豊多摩郡誌 大正五年
- (17) 江戸川区役所 江戸川区史 昭和三十年
- (18) 桜井勝三 東京市の市乳園(一) 地理(大塚地理学会) 五ノ四 昭和十八年